

## 創価教育研究センター員

顧問	高村忠成 (副学長補)
	田代康則 (副理事長)
	吉田良佑 (創価大学参与)
	篠原誠 (創価大学参与)
	佃操 (創価大学顧問)
センター長	神立孝一 (経済学部教授)
副センター長	高橋強 (文学部教授)
	杉山由紀男 (文学部助教授)
センター員	勘坂純市 (経済学部助教授)
	森幸雄 (文学部助教授)
	吉川成司 (教育学部助教授)
	開沼正 (通信教育部助教授)
	小出稔 (平和問題研究所助教授)
	水元昇 (短大経営科助教授)
	南紀子 (短大英語科助教授)
事務長	塩原将行
担当課長	薺沢賢一



## 〈編集後記〉

センターの紀要創刊号がここに完成した。寄稿していただいた先生方をはじめ、印刷をご担当いただいた（株）矢島印刷の皆様など、お世話になったすべての方々に心から御礼を申し上げたい。また、センター発足以前から、私たちの活動を常に温かく見守り、多大の激励と応援をしてくださった創立者池田先生に、この場をお借りして衷心より御礼申し上げ、あわせて講演会の広報などでご協力いただいた聖教新聞社の皆様、さらに数多くの貴重な資料を提供していただいた創友会をはじめとするすべての皆様に心から感謝の意を表したい。

発刊の日をセンター員一同で相談して3月16日にしたのは、戸田先生が、牧口先生から受け継ぎ発展させた創価の思想と行動のすべてを、創立者池田先生をリーダーとする後継の青年に託す記念の式典が行なわれたのが昭和33年のこの日であり、私たちもまた創価教育の理念と行動を継承し発展させ、社会と世界の教育・文化・平和に資するとの決意を込めたからである。本紀要がこの決意を実現できるよう、今後永く刊行し、質量共に充実させていくつもりである。

ところで、本紀要の発刊準備をしている昨年11月、コント、デュルクムなどのフランス社会学の導入をはじめとして日本の社会学の発展に多大な業績を残した田辺寿利の著作集の第5巻が、未来社から刊行された。この第5巻には田辺の最初期から絶筆に至るまでの論文・書評・随筆などが収められており、その中に、「創価教育学の学問的及び実際の価値」と『改造』に於ける『創価教育学』の批評」という2本の論稿がある。前者は、昭和5年11月に刊行された牧口先生の『創価教育学体系』第1巻の序文として同年10月に執筆されたもので、後者は昭和6年2月発行の雑誌『改造』の第13巻第2号に掲載され、同年3月に刊行された『創価教育学体系』第2巻の付録としても収録されたものであり、両者とも私たちがすでに目にしているものである。

この田辺著作集には、さらに、昭和9年発行の雑誌『レツェンゾ』4月号に掲載されたものとして、「社会生理学から見た二、三の文献」と題する論稿が収められており、その中で田辺は、デュルクムの『宗教生活の原初形態』や林達夫の『文芸復興』などとともに「牧口常三郎氏の『教育改造論』」を取り上げ、「牧口常三郎氏の『創価教育学体系』（富山房）は、社会学の上に教育学を樹立せんとするものであり、この意味に於いて教育社会学の文献として注目すべきもの」などと短い論評を加えている。この論稿は、私たちセンターのメンバーも初めて目にするものであった。田辺著作集を手にし、さてこれからしっかり読んでみようと思っていた矢先、一足早く読んだ伊藤貴雄君（本学人文学専攻の大学院

生)が、「新しいのが載ってますよ」と教えてくれたのである。

牧口先生が「創価教育学」を具体化するにあたって、フランス社会学とりわけデュルケムの社会学から大きな影響を受けたことは周知の事実であり、この影響関係に田辺が与かったこともよく知られている。牧口先生は述べている。「余をして若し社会学を修めしめなかつたら、及び法華經の信仰に入らなかつたならば、余が善良なる友人知己の様に、成るべく周囲の機嫌を損ねぬ様に、悪いことを見ても見ぬ振りをし、言ひたい事も控え目にして、人に可愛いがられなければ損であるといふ主義を守つて居れたであらう。」(『創価教育学体系』第3巻、富山房、75ページ)この言葉は、先生にとって社会学がどれほど重要な意味をもっていたかをうかがわせるに十分である。先生を国家権力と戦かわせ、獄死にまで至らせてその道に殉じさせた法華經信仰と並べて、このように言わしめる社会学は、先生にとって単に学問研究という次元を超えて、生き方そのものにまで深められ、高められていたのである。

この“創価教育学と社会学”などのテーマをはじめ、センターには実に多くの研究課題がある。そして、戸田先生、池田先生に関する本格的な研究——。もちろんこれらはひとりセンターだけでできることではなく、またそうすべきでもないと思う。内外の、そして世界中の研究者や研究機関をはじめとするすべての人たちと手を携えて、一歩また一歩と作業を進めていかなければならない。地道な小さな作業の積み重ねが、やがて大河の流れとなることを信じて。

(y・s)